

Valkyrie Fight 03



CG13枚 (18シーン)
本編74枚

+文字無し差分
全裸差分
おまけ

Name:エリーシャ

Age : 26?

Style: ?

本編中のセリフ: 青

会長付の秘書であり、謎多き女性。
顔の右側に大きなキズがあり、
それ故か奇妙な仮面を被っている。
裏の格闘技「Valkyrie Fight」は会長の
指示を受け、諸事万端は彼女が整えている。

Name:榛桐麗亜(はるきり・れいあ)

Age : JC?

Style:榛桐流護身術

本編中のセリフ: 赤

榛桐財閥の娘、彼女の母は現当主
である。
しかし女系一族である榛桐家の
当主は心身共に剛健であることが
求められ、当主をめざす麗亜は
裏の格闘技「Valkyrie Fight」で
実力を示さなければならない。

Name:榛桐富子(はるきり・とみこ)

Age : 60代

Style:榛桐流古武術

本編中のセリフ: 橙

榛桐財閥先代当主であり現会長、
麗亜の祖母でもある。
現職を退いてなお影響力は強く、
恐れられている。

Name:火野鞠子(ひの・まりこ)

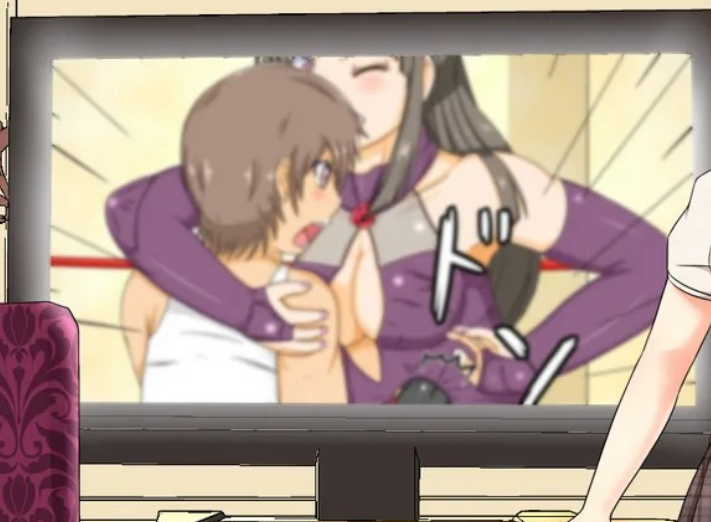
Age : 25

Style:合気道火野流

本編中のセリフ: 緑

普段は温和な佇まいだが、内面は
好戦的で、「Valkyrie Fight」の
リングにしばしば上がっている。
合気道の師範であり、一流のさばき
を見せるが、時々わざと打撃を
喰らう節もある。
彼女の中では制圧も痛みも等しく
快樂なのかもしれない。

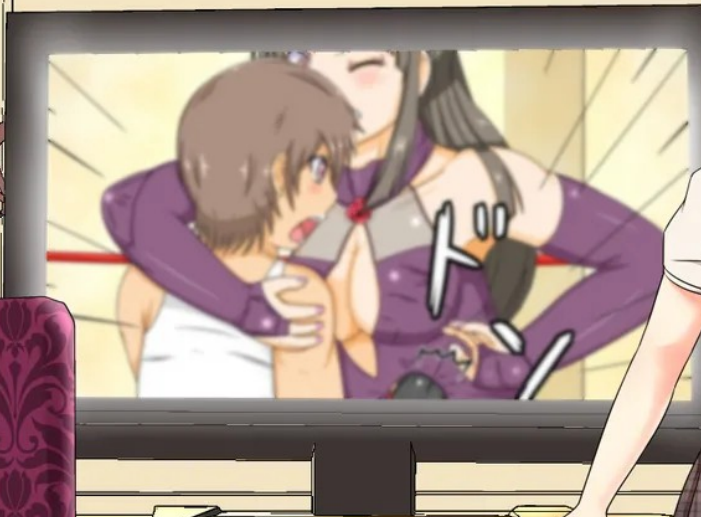
「おばあ様、また観てらっしゃるの？」
中学生くらいの見た目をした少女が、椅子に深く
腰を掛けた老婆に話しかけた。



「おや、麗亜れいあかい？ダメよここに入っちゃ」
大きな液晶スクリーンには、和やかな会話に
似つかわしくくない、女性たちが痴態をさらしながら
争う姿が映し出されている。

麗亜と呼ばれた少女はぴよんとスクリーンの前に躍り出た。

「おばあ様もお母さまも、これにでたんでしょ？」



「そうだよ、麗亜」

老婆は言葉を繋ぐ。

「榛桐家の当主はたるものは強くなきゃ

いけないのさ」

「でね！でね！おばあ様！」

麗亜は忙しなく動き回る。

「私もこれに出ようと思うの！」

「おや、麗亜がかい？」

「榛桐家の当主になるために避けて通れないなら…」

私は乗り越えて見せるわ！」

麗亜は威勢よく言葉を放った。



「そうだねえ、でもまだ少し早いんじゃないかねえ」

老婆は眉間に皺しわを寄せる。

「そんなことないわ、

いままでいっぱい鍛えたんだもの！」

「それに…」

「それに？」

スピーカーからは女性の悲鳴あがる。



「この女たちのように無様な姿は晒さないわ！」

「無様…!?!」

老婆の眉間にさらに深い皺が刻まれる。

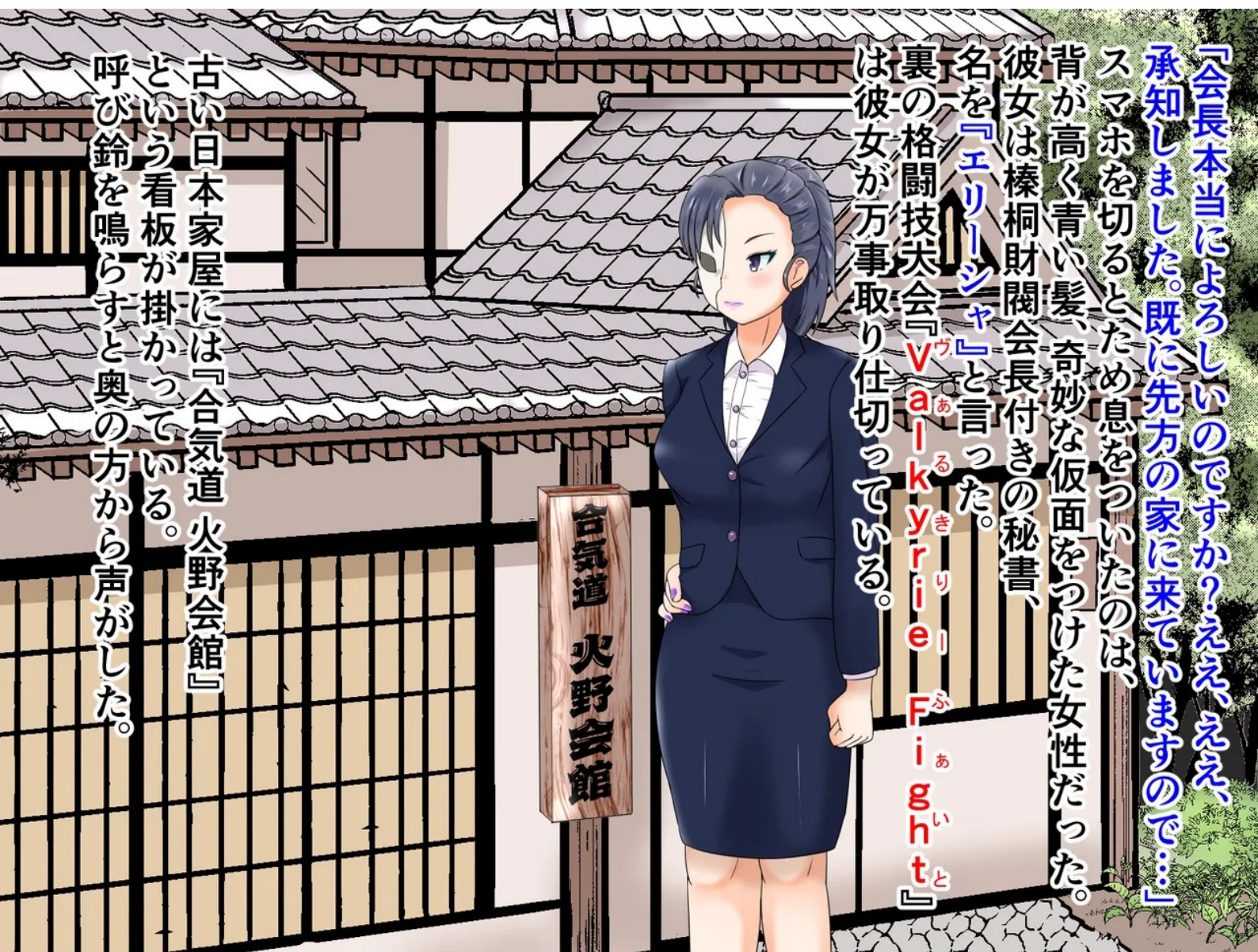
「いいでしょう、やりなさい麗亜。準備は整えます」

「ほんとう？ありがとうございますおばあ様！」

麗亜に抱きつかれた老婆の顔には、少しの綻びもなかった。

「会長本当によろしいのですか？ええ、ええ、承知しました。既に先方の家に来ていますので…」
スマホを切るとため息をついたのは、背が高く青い髪、奇妙な仮面をつけた女性だった。彼女は榛桐財閥会長付きの秘書、名を『エリーシャ』と言った。
裏の格闘技大会『Walkyrie Fight』は彼女が万事取り仕切っている。

古い日本家屋には『合気道火野会館』という看板が掛かっている。
呼び鈴を鳴らすと奥の方から声がした。



「お待ちしてましたわ、エリーシャさん」
出迎えたのは見かけは歳の頃、
二十歳半ばの黒髪の女性だったが、佇まいはさうに
年上を感じさせた。

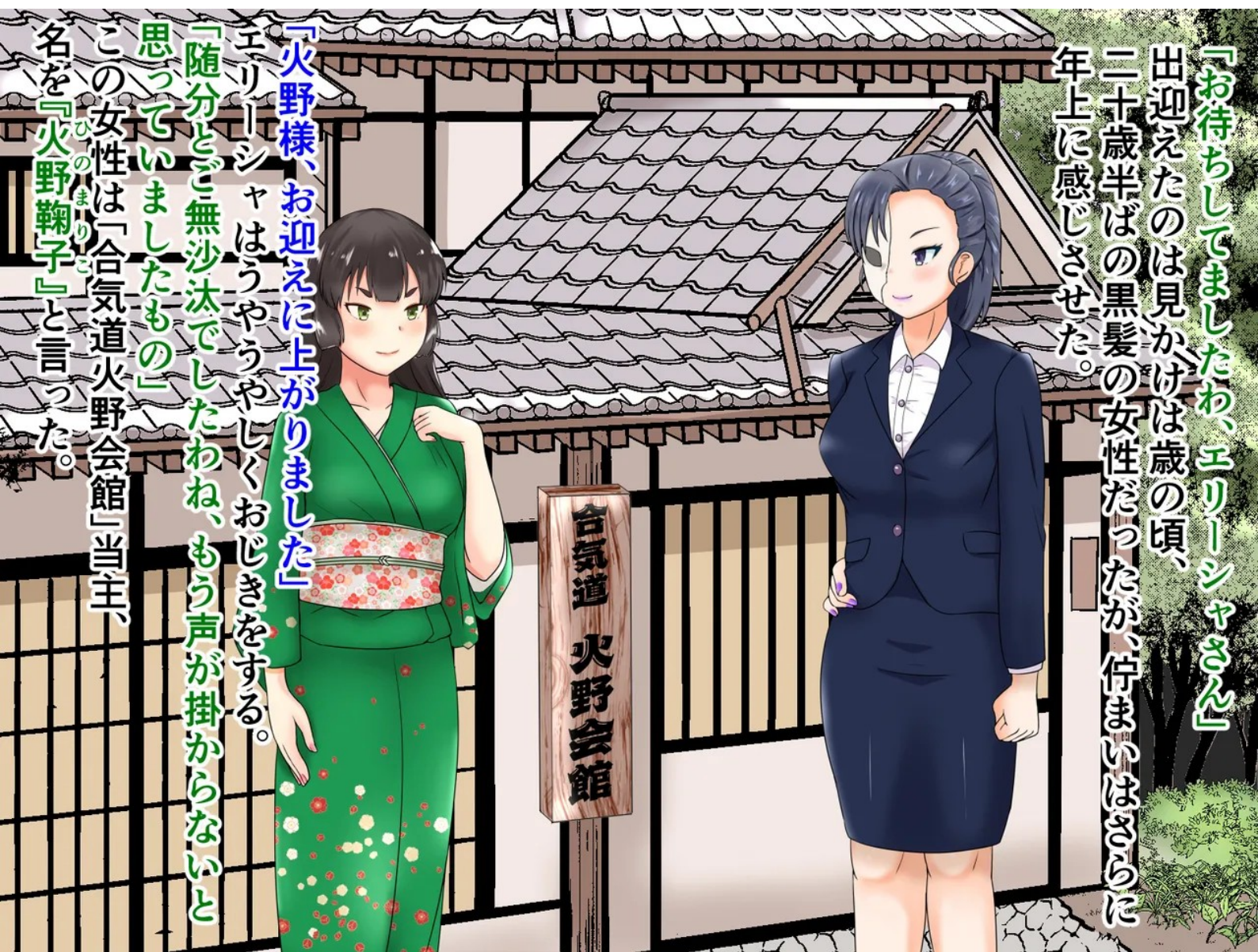
「火野様、お迎えに上がりました」

エリーシャはうやうやしくおじきをする。

「随分とご無沙汰でしたわね、もう声が掛からないと
思っていましたもの」

この女性は「合気道火野会館」当主、
名を『火野鞠子』と言った。

合気道 火野会館



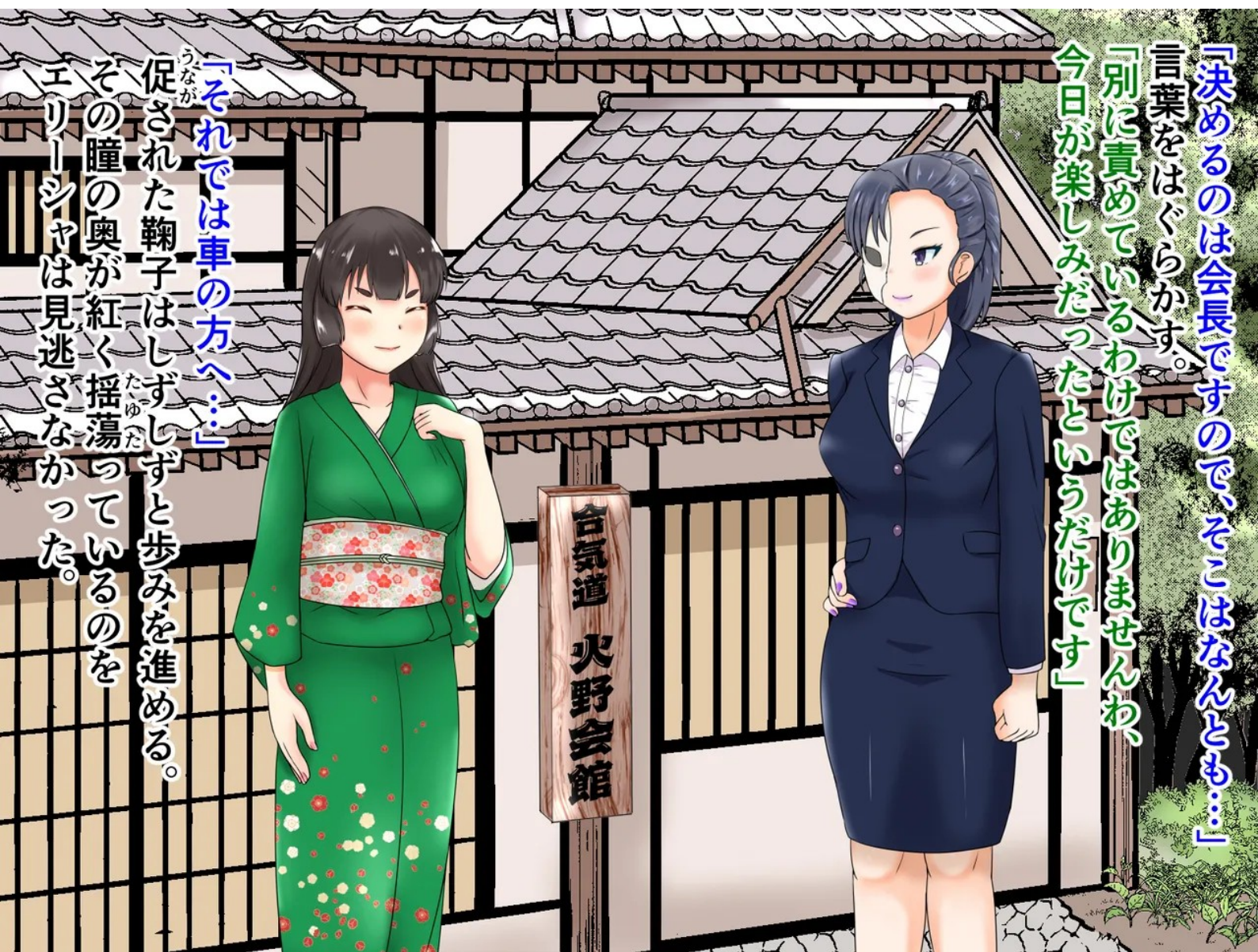
「決めるのは会長ですの、そこはなんとも……」
言葉をはぐらかす。

「別に責めているわけではありませんわ、
今日が楽しみだったというだけです」

「それでは車の方へ……」

促された鞠子はしじしすと歩みを進める。


その瞳の奥が紅く揺蕩っているのを
エリーシャは見逃さなかった。



「お嬢様、到着しました」
エリーシヤが後部座席のドアを開けると
麗亜がピヨンと飛び出した。
「ここが会場？地下闘技場じゃないのね」



「相手の闘技者は先に着いておりますので、
控室で着替えを済ませてください」
「まあなんだっていいわ！私がどうせ勝つんだし」
麗亜は自信に満ちた笑みを浮かべながら、
ビルのエントランスへと駆けていった。



「屋上にリングがあるなんて、洒落てるじゃない」
高層ビルの屋上に不釣り合いなリングが、
ライトに照らされて浮かんでいるようだった。

「今回は地下闘技場ではなく、当社
所有のビルにリングを設けました」
「ふうん。で、私の相手はどこなの？」
麗亜はきよろきよろと辺りを見回した。
「先にリングが上がってらっしゃいますよ」

「やっと来ましたのね、待ちくたびれていたところですよ」

麗亜はリングの上から響く声に、視線を移す。

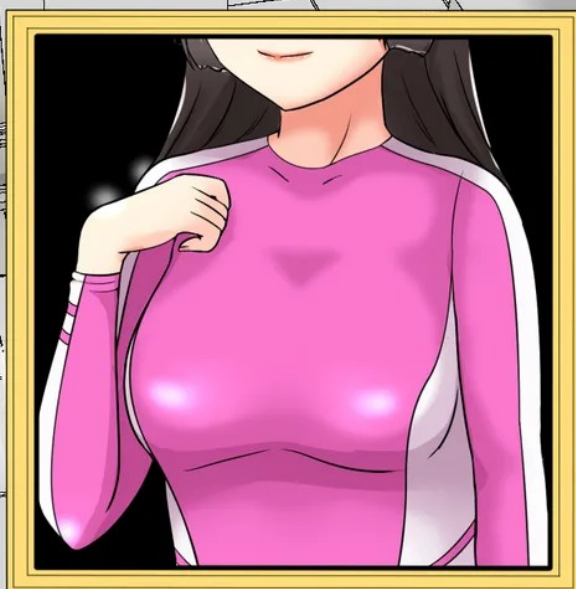
「貴方が可哀^{かわい}そうな私の相手ね！」

キツとした瞳で鞆子を見つめる麗亜の瞳が胸の辺りで見開いた。

「あっ！む…む…！」



「あら、なにかしら？」
麗亜の視線の先に気付いた鞠子は、
胸を突き出して体をくねらせる。



「ふ、ふん！
デカけりゃいいってもんじゃないわよ！」
顔を赤らめながら麗亜は視線を逸らした。

「まあまあお二人とも、時間もありませんので準備しましょう」

エリーシャがたしなめる。

「いいわ！いつだって私は行けるわよ！」

「私も大丈夫ですわ、早く始めましょう」
早くも二人は闘志に満ちている。

「ルールは既にご存知ですね？」

では開始前にこの薬を飲んでいただきます」

エリーシャはポケットから、

ビニールに包まれた2錠のカプセル剤を

取り出した。



「これは薬？これをどうするの？」

麗亜は、訝しいぶかげに出されたカプセル剤を見つめる。

「知らないのね…これはこうするのよ」

鞠子はひよいとそれを手に取ると、
すぐに飲みこんでわら啜う。



「どうしたの？お薬飲むのは苦手？」

わかりやすく挑発的な笑みを浮かべる鞠子。

「馬鹿にしないでよ！」

こんなものなんでもないわ！」

目を瞑つぶつてカプセルをぐくりと飲み込む。

「さあ、準備はOKですね。」

二人ともリングに上がってください。」

リングに上がると両者は早くも中央でにらみ合い、火花を散らしている。二人ともコーナーポストについてください。制御室からブザーを鳴らすので、それが試合開始の合図です」

そういうとエリーシャは建物の中に消えていく。ピルの屋上には強い風が吹きつけていたが、闘技者の二人はそれを意にも介さず、お互いから視線を外さなかった。



ブー！
ブザーのような音が鳴り響くと、
二人はゆっくりとリングの中央へ
歩み寄った。

両手を挙げて構えをとる鞠子に対し、
麗亜は腕をだらりと下げて
体を弛緩させている。



刹那^{せつな}

麗亜の拳が鞠子の胸元に振り下ろされた。弛緩から一瞬で拳を固め打撃に転ずる、システマのストライクという打撃法だ。

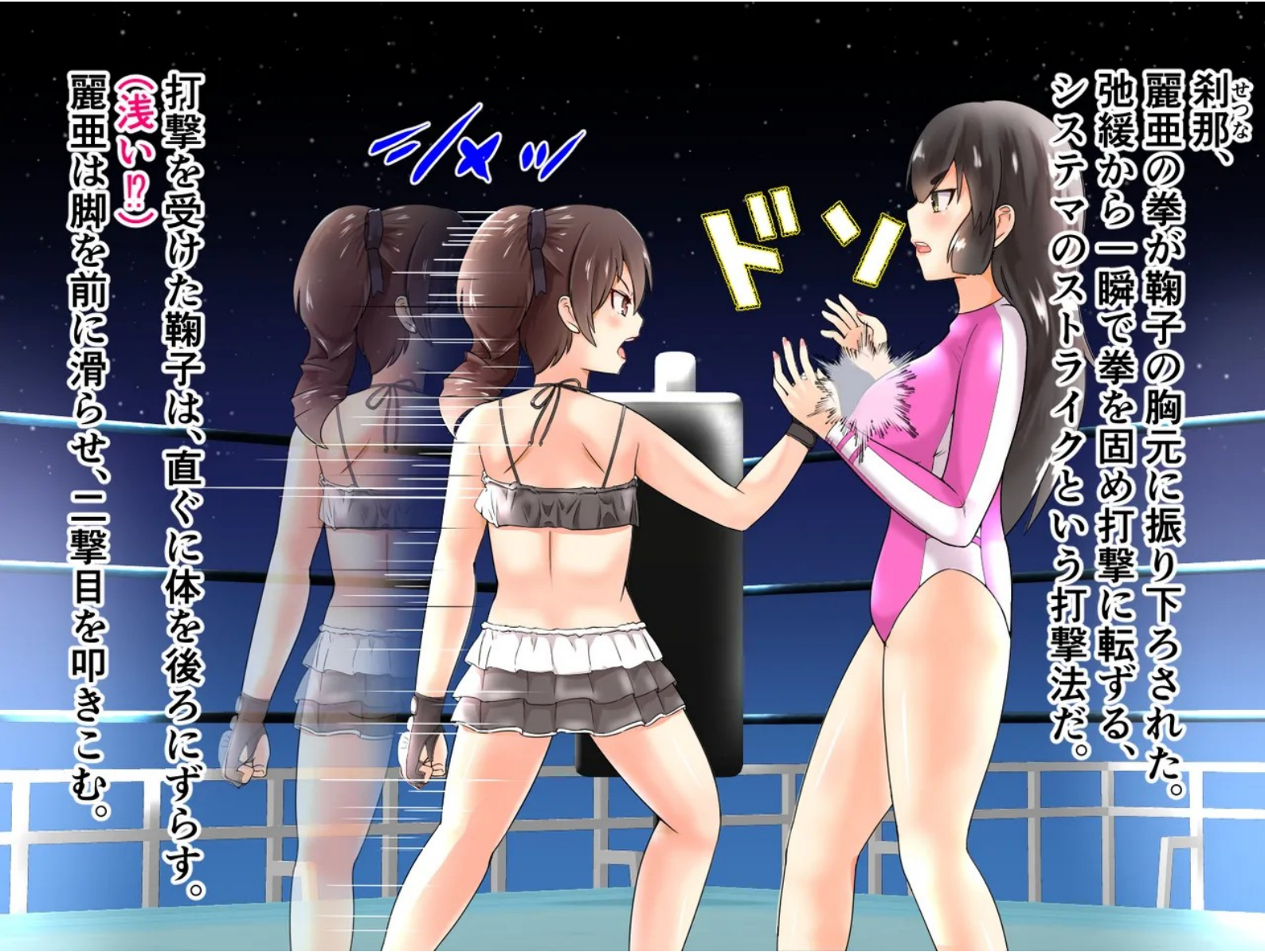
ドッ

スッ
ッ
ッ

打撃を受けた鞠子は、直ぐに体を後ろにずらす。

浅い!!

麗亜は脚を前に滑らせ、二撃目を叩きこむ。



麗亜の拳が再び鞆子に振り降ろされる。
しかし鞆子は手の甲で麗亜の手首を
振り払い、打撃の軌道を変えた。



払われた拳が空を切る。
自分の打撃をいなされたことに、
麗亜は驚いていた。
そんなことが容易にできる
拳の速さではないと、自負していたからだ。

麗亜の意識が逸れた隙に
鞠子は前に出た麗亜の脚に、
自分の脚を滑らせた。



踵のあたりを軽く払うと
麗亜の重心は容易く崩れ、
体が前のめりに倒れ込んだ。

「おぶっ！」
リングに体が叩きつけられる。くく
鞠子の体捌きさばに、麗亜は思考が追い付かなかった。

ガッ

ドゥ

（ぶっ、なんで私が倒れてんのよ！）
とにかく体をおこそうと、意識を切り替える。



ドン！
麗亜の背中を鞠子の脚が、力任せに
踏みしめる。

「あらあら、いい恰好ね」
鞠子はクスクスと嗤いながら脚を踏みしめ、
麗亜を挑発する。





「がっ…」

麗亜は衝撃と圧迫感で声にならなかった。

ギリ

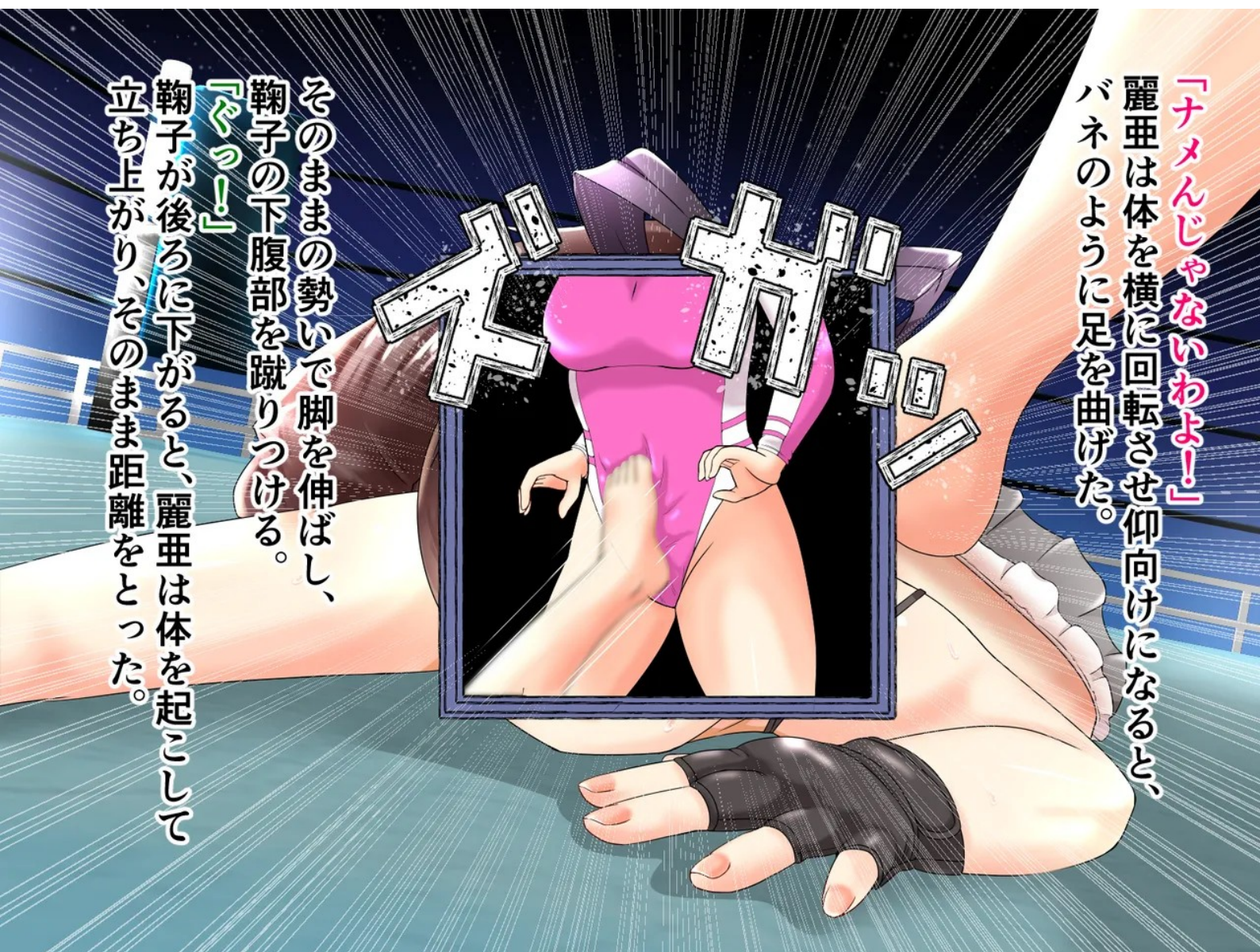
「どうしたの？まだまだ始まったばかりよ」
再び脚を上げて、踏みつけの体制をとった。

「ナメんじやないわよ!」
麗亜は体を横に回転させ仰向けになると、
バネのように足を曲げた。

そのままの勢いで脚を伸ばし、
鞠子の下腹部を蹴りつける。

「ぐっ!」

鞠子が後ろに下がると、麗亜は体を起こして
立ち上がり、そのまま距離をとった。



「なかなかいい動きね、少し貴方を
見直したわ♪」
鞠子はコーナーポストにもたれかかりながら、
片膝をついている麗亜を見下ろす。

「そうね、おばさんもまあまあね！」
鞠子を睨み麗亜は言葉を吐き捨てた。

（打撃をすぐに見切られた…？
イラつくけど攻めを変えなきゃ…）



麗亜が考えを巡らせていると、
鞠子が言葉をつなぐ。
「貴方、恐い顔をしてるわよ、
少しリラックスしなさいな♡」

ウフフ♡

む

「このおばさん、なに言ってるの……?」
急に柔らかな態度をとる姿を訝しんだ。



「感じない？体の火照り…
熱い芯の疼きを…」
鞠子はゆっくりと自分の胸を揉みしだき始める。

はっ

はっ

むに♡

むに♡

（はありなにやっつてんのこの人??）
麗亜は鞠子の突然の奇行に啞然とした。

ウ

「貴方も感じているはずよ…
自分の体に問いかけてみて…」
鞠子はさらに妖しく問いかける。

（んっ…そういえば体が…）

麗亜は今まで感じたことのない
体の奥からの熱い鼓動に戸惑っていた。

（なんなのよ！）

このままじゃ相手のペースに吞まれる！

ゴクッ



「はあああああ！」

麗亜は鞠子に一直線に詰め寄る。

「もうヤケになったの？」

「可愛い子ね、いらっしやい」

鞠子は脚を前後に開き、麗亜に対して斜めに構える。

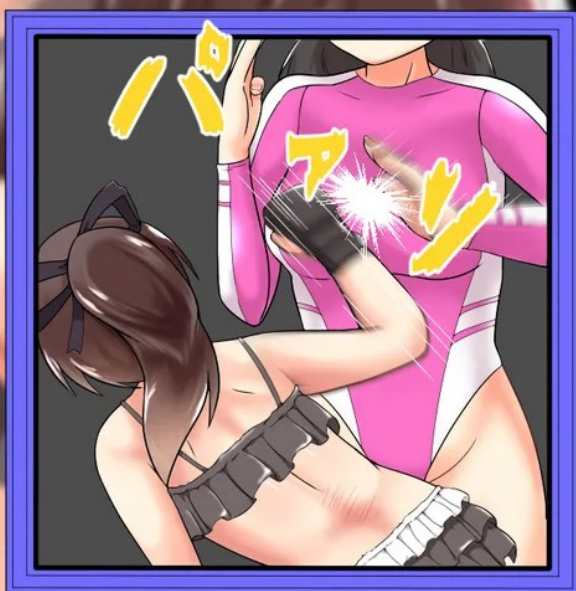
（**さば**）**（打撃を捌かれるなら、それを利用してやるわ！）**

右腕をしならせ、大振りのフックのように鞠子の側面から叩きこむ。

インパクトの瞬間に拳を握りしめた。



上体を逸らした鞠子は打撃の起動に合わせて麗亜の拳を掌で横に押し込むように払いのける。
「この拳速で捌けるなんてどういう神経してんのよ！」



拳に全身を預けた麗亜は、そのままよろけるかには見えた。しかし、麗亜もそこまでは読んでいた。

麗亜はそのまま跳ね上がり、体を一回転させた。
側転蹴りのような軌道で、鞠子の顔にヒットした。



「…っ!」

鞠子の顔が初めて歪む。

(当たった! どうしようおばさん!)

麗亜は脚から伝わる感触を確かに感じた。

しかし鞠子は倒れなかった。
回内を切ったのか唇の端から
一筋の血が伝う。

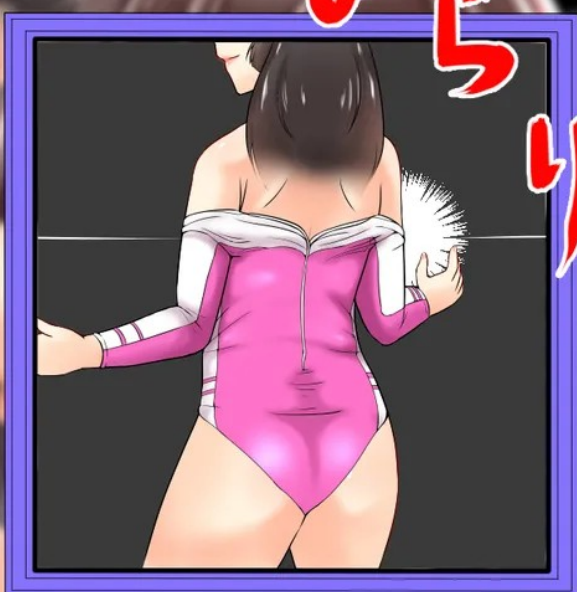
ズズズズ



（そんな、確実に顔面をとらえたはず…）
鞠子は仰向けに転がった麗亜を、
暗い瞳で見下ろしていた。

麗亜は気付かなかつたが、
鞠子は背中中のジツパーをおろしていた。

はらり



異様な気配を感じて、身を起そうとする麗亜に
鞠子が覆いかぶさった。

鞠子は麗亜にのしかかり、上体をホールドして動きを封じた。

「ぐっ！うぐっ…むー！むー！」
いきなり乳房で顔を圧迫され、麗亜は驚きの声を上げる。



「今のは少し驚いたわ…次は貴方の番よ！」
ギリギリと腕を締め付けながら、さらに圧迫を強めていく。

「ほら、ママのおっぱいの時間よ♡」
優しい言葉とは裏腹に締め付けは強まる。



ギチ

ギチ

ギチ

ピクッ

「ぎゅっ〜ぐゅっ〜」
痛みと圧迫感で麗亜はシタバタともがいた。

くそっ！こんなものこうしてやる！
とっさに麗亜は鞠子の乳房に歯を立てた。



「あんっ！痛いっ！」
とっさの麗亜の攻撃に鞠子は悲痛な声を
上げた。

麗亜の抵抗に、上半身にかけてられた力が緩む。



（今だ、抜ける！）
緩んだ分だけ体の可動域が確保される。
麗亜の右足がマットを蹴った。

麗亜の膝が鞠子の顔の側面をとらえる。
完璧なヒットではないが、十分な衝撃
を与えていた。

ガッ

ガッ

「がはっ！」

鞠子の上半体が仰け反る。

麗亜はすりと肉体の檻おりから抜け出した……

かに見えた。



抜け出そうとする麗亜の腰を膝で浮かし、逃げられないように体を制する。



「ああああ、逃げちゃダメよ、これからじゃない？」
「くっ、効いてないの？手応えあったのに！」
再び逃げ場を失い、麗亜はもがいた。

鞠子は麗亜の水着をひっぱり、お尻を露出させる。

ハイッ

「なっ、なにしてんのよ！
離せ！このババア！」
顔を赤らめ麗亜は悪態をつく。

アッ



「ここを責められると、大の男でも抵抗できなくなっちゃうのよ」
鞠子は麗亜のアナルに中指を滑らせる。



「おほおっ！や、やめて！」
いきなり自分の中に侵入してきた指に無様な悲鳴を上げる。

ビクッ♡

ビクッ♡



鞠子の指は一転、腸壁をなぞるような優しいストロークに変化する。



「おほっ、ひぐっ、やめ…気持ち悪い…」言葉とは裏腹に、鞠子の指の動きに、麗亜は敏感に反応する。



「ふうん、ここかしら？それともここ？」
膣内を押ししたり、こすったり、
うねうねと鞠子の指が這いまわる。



「ひっ、ひっ、ぐっ…あんっ」

鞠子の責めがひたと止まる。

「みいつけた♡」

不意に指に力を込め、ぐっと腸壁ちようへんきを押し込む。



「あふっ! あっ、あっ、いやあ...」
麗亜はビクビクと体を震わせ、痙攣したかのように
小刻みに跳ねた。



「イッたのは初めて? もしそうだったら
お尻の感度はなかなかね」
鞠子は麗亜の拘束を解き、満足そうな笑みを
浮かべる。



「うう…もぅらやあ…」
麗亜はよろよろと立ち上がり、
おぼつかない足で離れようとする。

麗亜はいままで感じたことのない、快感や
羞恥、痛みでうまく思考が働かなかった。



「あらあら、どこへいくのお？」
「ひいっ!!」

麗亜の後ろに張り付いた。

フリ...

ガッ

ギッ

麗亜の精神は恐怖に支配されていた。
とにかくこの化け物から逃れたい一心だった。



「悪い子はこうしちやおうかしら♡」
鞠子は麗亜の水着を引きちぎる。

「いやあああああ！」
露になった乳房をとっさに手で隠そうとする。
「可愛い声ね、ますます興奮しちゃう♡」



鞠子は麗亜の手を押しつけると
手で乱暴に揉みしだく
「いやっ！やめて！やめてえー！」

「本当にやめていいの？
あなたの体は欲しがっているはずよ。
もっと正直になりなさい」
麗亜は全身がちりちりと焼けるような疼うずきに
包まれていた。





鞠子の手が乳首をつまむと
指でキュツとしめあげる。
「あんっ♡あつ、あつ、だめえ♡」

指の腹で乳首を揉んだり引っ張ったりと
緩急をつけて刺激していく。
「ほら、こんなに感じていないじゃない」
鞠子は麗亜の耳元で囁く。

「こっちもそろそろ頃合いかしら？」
鞠子の手が麗亜の股間に滑り込む。
麗亜の体がビクンと跳ねたが、
特に抵抗はしなかった。



「ここは自分で触ったことあるの？」
「...」
麗亜は顔を赤らめながらも何も言わない。

麗亜は器用な手つきで、クリトリスを左右からつまみ、包皮を向いて露出させる。



露出したクリトリスの先端を、弾くように刺激する。
「あっあっ♡んっ♡♡♡」
麗亜は腕をだらりとさげ、抵抗するそぶりすら見せなくなった。

「そうよ…快感に身を任せるの、
もっともっと良くなれるわ…」
鞠子の声が論ずようにやさしく響く。



麗亜の指が大陰唇から、小陰唇、膣口へと滑り込む。
くちゅくちゅと卑猥な音が響く、
すでに受け入れ十分なほどに湿り気を帯びていた。

くちゅ

くちゅ

「ううん…♡そ、そこは許して…」
言葉では哀願^{あいがん}するものの、
遠慮なしに鞠子の指がずぶずぶと沈む
鞠子の指に成す術^{すべ}もない。



「お尻とどっちがいかしら？いい声聞かせてね♡」
膣内で麗亜の指が奥へ奥へと侵入する。

指の動きはさらに激しさを増し、
腔内をかき回す。
くちゅくちゅと淫猥な音を響かせながら、
愛液でぐっしよりと濡れている。

「さあ、いきなさい！自分を解き放つよ！」
鞠子は急に怒声をあげると、
麗亜の体がピクンと跳ねた。



「そ、そんな…あっ♡あんっ♡あああああああ!!」
それはまさに絶叫だった。

鞠子は麗亜を解放すると、麗亜はがくりと膝を付いた。
体はまだ小刻みに震えている。



「素敵な声だったわ…私は貴方が屈服する叫びを聴きたかったの♡」
鞠子はうっとりとした目で麗亜を見降ろした。
「さあ次は貴方の番よ」

麗亜のポニーテールを乱暴につかむと
鞠子は自分の股間に麗亜の顔をあてがう。



汗と興奮で濡れそぼった放香が、
意識が虚ろな麗華を淫靡に刺激した。
「やり方は教えたからわかるわね？」

麗亜はおずおずと自分の下を突き出し、クリトリスの辺りを刺激する。

「そうよ…いい子ね、もつと口全体を使いなさい♡」

ピクッ

ピクッ



そう言われると麗亜は、唇でクリトリスを挟んだり吸い上げたりと、ややぎこちない愛撫あいぶを続ける。

「あんっ♡そうよ！もっと激しく！」

鞠子の声は喜悦に濡れていた。
麗亜はさらに強くクリトリスを吸い上げて
刺激する。

はぁ♡

ぢゃうううう

「クリばかりじゃダメよ、こっちもしなさい！」
鞠子は掴んだ麗亜の頭を、
強引にヴァギナに誘導する。



麗亜は小さな舌先を尖らせて、
鞠子の膣内に侵入させる。
「おっおっ♡いいわ！続けなさい！」
鞠子は体を震わせながら命令した。

ビクッ

麗亜も倒錯したこの空間に吞まれ、
犬になり果てたように舌を動かしていた。



麗亜は鞠子の膣内で舌先を躍らせ、
献身的ともいえる奉仕を続ける。

ビビビビ

ビビビ

しゃああ...

鞠子は快感と征服欲に体を震わせて絶頂を迎える。
「もっとよ！もっと舐めなさい！
イクっ♡あっあんっ♡」



「クリトリスを擦り合わせるのよ、
そう、そこでいいわ」
麗亜は鞠子のいいなりだった。

「さあ腰を動かさなさい！」
「は、はい……」
麗亜は腰をゆっくりとスライドさせる。



「あっ♡あっ♡気持ちいい…」
「これが女同士のセックスよ、
さあもっと激しく快楽を貪りなさい！」
むさぼ

鞠子に急かさされ、犬のように腰を振る麗亜。
「もっと！もっと気持ち良くなりたい！」
思考のタガが外れたように快楽を求めている。



鞠子の果てる姿を観て、麗亜や少しずつ冷静さを取り戻す。

（私はなんで言いなりになってるの…?!）
ビル屋上の風が体の火照りを覚まし、思考の霧が消えていくようだった。

（私は^{はるきり}榛桐財閥の後継者候補なのよ！
相手を屈服させるのは私のはずよ！）
闘志を鼓舞し、幾分か、体に力を取り戻す。
（いまならやれる、呼吸を整えて！）
麗亜は自分の体にそう言い聞かせた。



（喰らいなさいオバサン！）
麗亜は渾身の打撃を鞠子の鳩尾に直撃させる。
「ごふっ！」

呻く鞠子の顔には微塵の余裕も感じられない。

（もう一撃！）

さらに麗亜の渾身の一撃が鞠子の胸元に
突き刺さる。

「がはっ……！」





「好き放題やってくれたじゃない、

こんどはあんたが這いつくばる番よ!」

麗亜は拳を叩きつけるように、鞠子の顔に振り下ろす。

「……!」

鞠子は防戦一方だった。

しかし、その瞳に動揺は消えていた。

「あああああ!」

次第に大振りになる麗亜の拳を、見逃さなかった。

「死ね!死ね!」

麗亜は半狂乱になったように叫びながら拳を振り下ろし続ける。さらに大きく拳を振り上げた刹那、それは起こった

ガッ

麗亜の喉元の鞠子の手刀が突き刺さった。「かふっ!がっ...ひゅー!」
麗亜は喉元を抑えながら悶絶した。



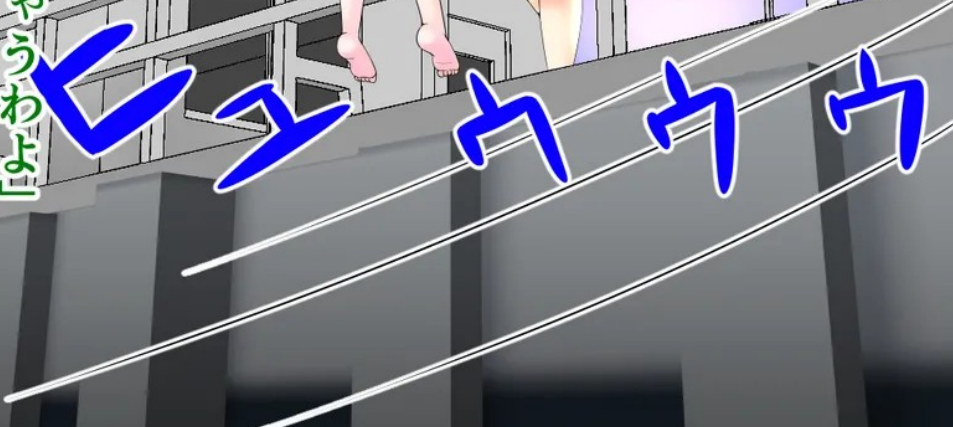
鞠子は麗亜の体を軽々と持ち上げ、
ビルの縁に立つ。
麗亜の体は広大な闇の中に浮いていた。

「ほら、抵抗しないと死んじゃうわよ」
「うぐっ…」

麗亜はまだ声も出せない。

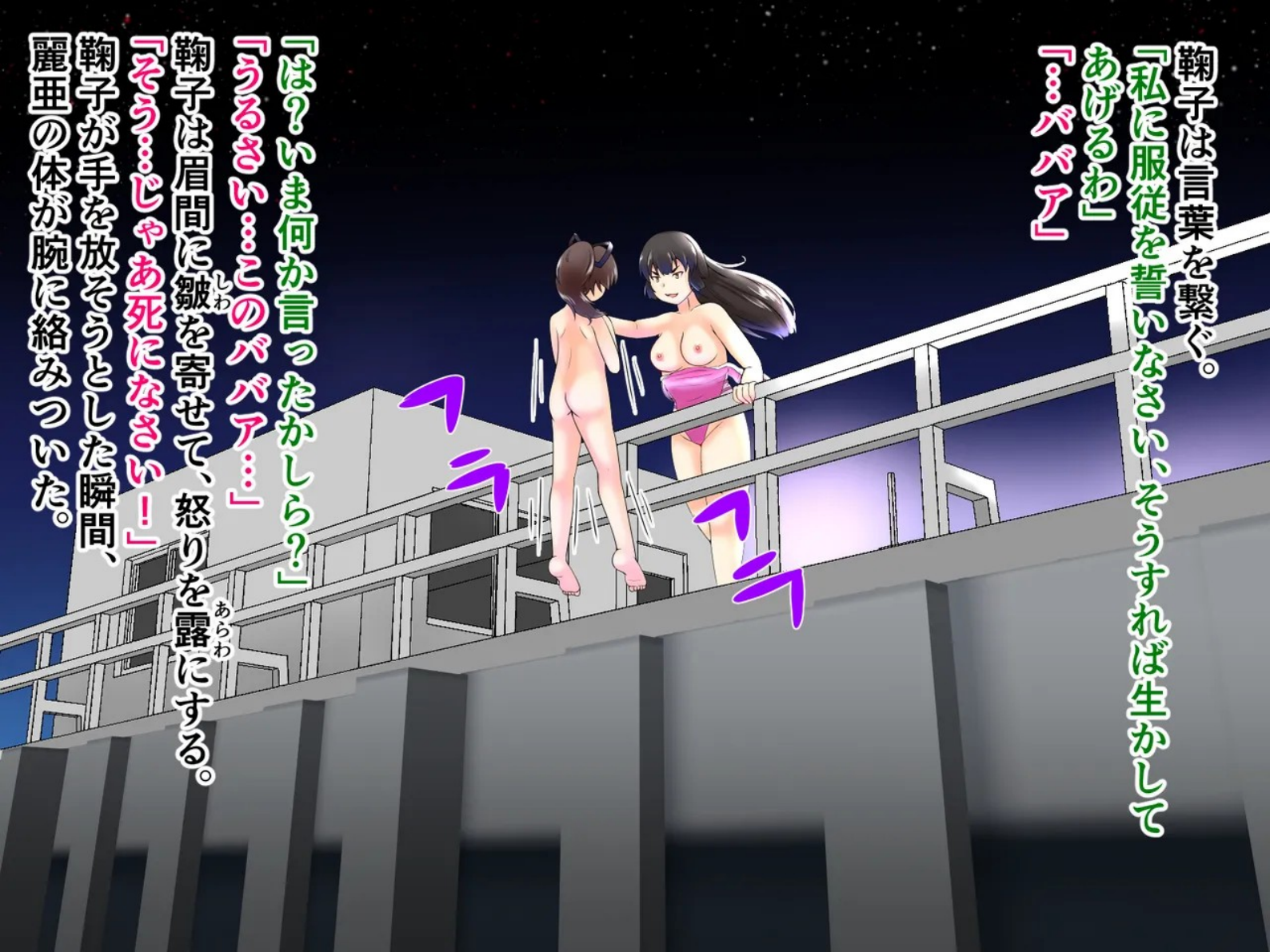
「せっかく私に奉仕させてあげたのに、
貴方は裏切ったのよ。」

「その罪は償ってもらおうわ」



鞠子は言葉を繋ぐ。
「私に服従を誓いなさい、そうすれば生かしてあげるわ」
「…ババア」

「は？いま何か言ったかしら？」
「うるさい…このババア…」
鞠子は眉間に皺しわを寄せて、怒りを露あらわにする。
「そう…じゃあ死になさい！」
鞠子が手を放そうとした瞬間、麗亜の体が腕に絡みついた。



伸ばされた鞠子の腕にしがみつき、
両脚は頭部を締め上げる。
三角締めが見事に決まっていた。



「ぐっあんた、このまま落ちたいの!!」

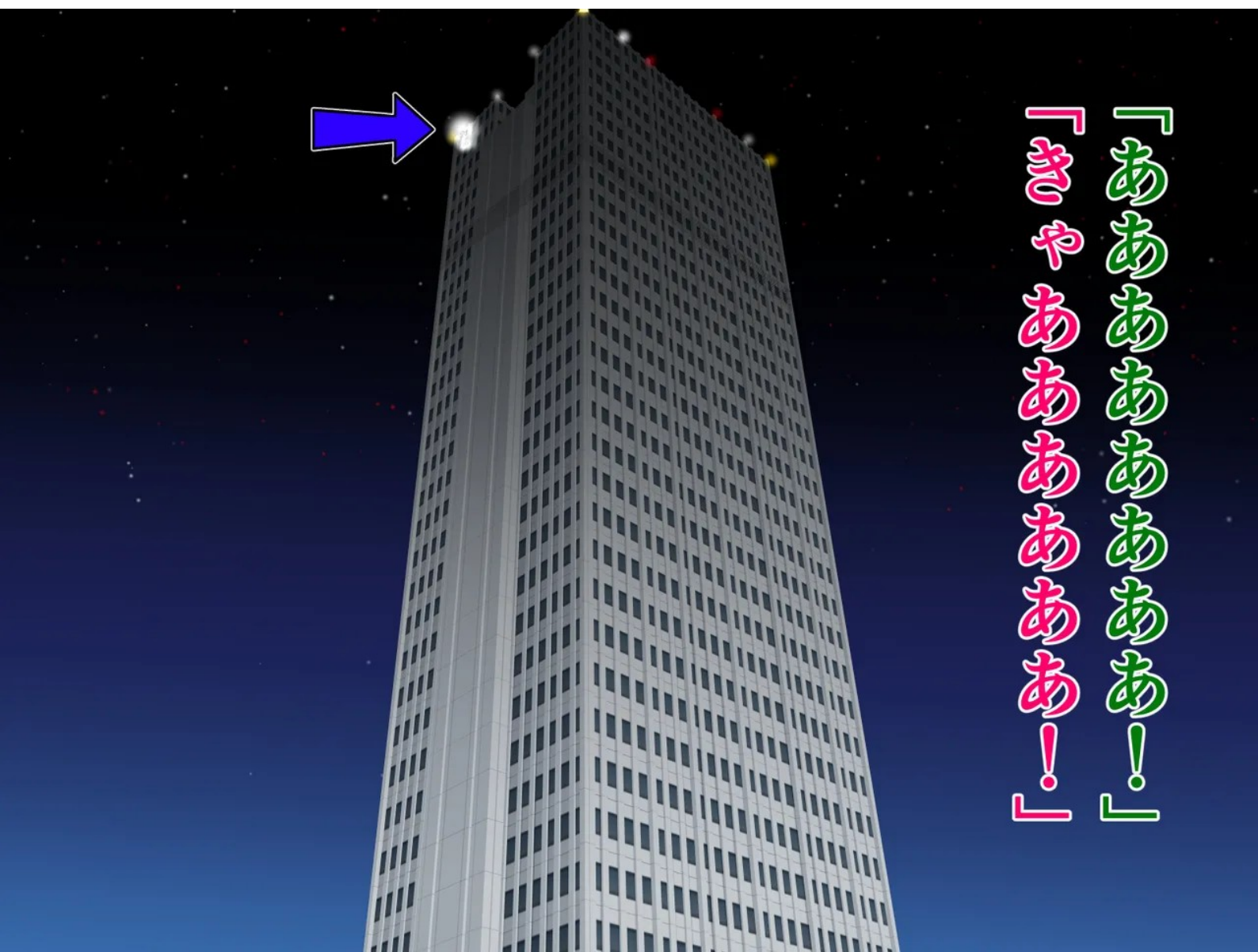
「屈服するくらいなら死んだほうがマシよ!」

麗亜はさらに締め付けを強める。

鞠子は徐々に力を失い、意識が白濁はくたくとしていた。

「くそガキ…あんたなんか!」

そう言いかけると、鞠子の体が柵かたむの外に
ふらりと傾いた。



「あああああああああ！」
「きゃあああああああ！」

どさっ!!
10階ほどの高さを落ちたところで、
勢いよく落下防止ネットが揺れた。

黒い網越しに浮かぶ二人の姿は、
虚空に浮かぶようだった。

フムマアアア

麗亜はピクリとも動かなかった。
鞠子は呻きながら、よるよると体を
持ち上げようとしている。
「勝負がついたようですね」



エリーシヤが上から縄梯子を投げた。
鞠子は縄梯子をつたって屋上にあがる。

「火野さま、お疲れ様でした」

「…」

「どうしたのですか？せっかく勝利されたのに…」

「イったのよ」

「と申しますと？」

「落ちるときね、今までにない快感を感じたわ、
私はあの子の気迫にイカされたのね」

「はあ…」

「引き分けよ、私も遊びすぎたわ」



そういうと鞠子はビルの中に消えていった。
「闘技者とは不思議なものね」
エリーシヤは鞠子の後ろ姿を見送った。
「あの人、最初から落下防止ネットに
気付いていたのかしら……？」
ふとした疑問が沸き上がったが、
考えないことにした。

「さて、麗亜お嬢様を引き上げますか！」



今日、このビルで起こったことは、誰も知らないし
誰も語らない。

ビデオに残された闘いの証は
一部の限られた者達の愉悦として残るのだ。

Valkyrie
Fight
03
完



ラガー
pixivID:536521
twitter:
@Twi2Ryu

